

令和四年度 道伝えの日 芭蕉忌句会 入賞句

○兼題句 「芭蕉忌」

「俳人協会岐阜県支部 大野嶋士選」

一〇、芭蕉忌や小雨を凌ぐ檜笠

奥田 貴美子

芭蕉といえば旅に生きた人。その旅に関わる用具の「笠」を詠んだ句や俳文がある。まさに芭蕉の核心をとらえた正統派の一句。

一九、芭蕉忌や闇にうごめく鹿の数

佐藤 満知子

鹿を詠んだ句は芭蕉にもあるが、これはまた古典的というより超現実的な異色の句であり、西欧絵画的な趣を湛えた動的構図の句。

・互選

〔一席〕

三四、時雨忌や夢の続きの旅靴

金井 双峰

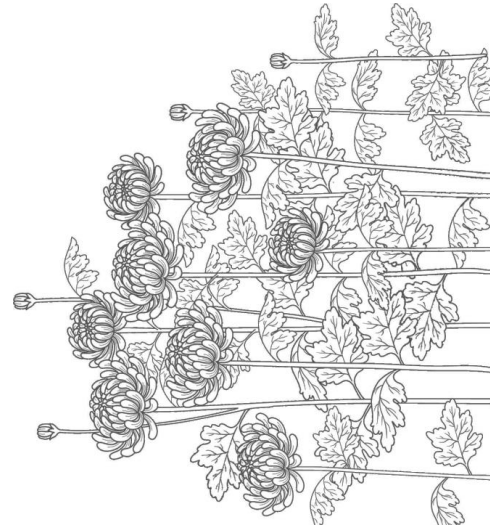
四七、木漏れ日の石のぬくもり芭蕉の忌

中井 孝子

〔三席〕

一三、芭蕉忌や旅の名残の御朱印帳

大滝 篤子



○ 当季雑詠句 (秋・冬)

「俳人協会岐阜県支部 大野嶋士選」

一七、 秋草や焼印入りの桶二つ

尾崎 淑子

秋草が桶に入っているとも、また秋草の生えている近くに桶が置かれているとも解され、どちらでもよい。静的な構図ながら姿、格調正しく「二」という数字に妙味が存在する。

二一、 胴に足す命の水や菊人形

山越 朝子

菊人形には動物のような命は存在せず、言わば「虚の命」と見立てて、注ぐ水を「命の水」とした。上五中七のあいまいさが、下五に至って一挙に解決される鮮やかさが一句のポイントだ。

・ 互選

「一席」

四一、 ドミノめく稲刈られゆくコンバイン

大溝 裕子

「二席」

一二、 箸が追ふ滑る子芋の味見かな

下垣内 町子

一九、 人間も騙す桑山子の割烹着

佐藤 満知子

三六、 夕映えのトランプットや桐一葉

今寺 久枝

四七、 一位の実含めば浮かぶ里の景

中井 孝子



○ 当季雑詠句(秋・冬)

・ 飛驒俳句会代表 伊藤浩子選

〔飛驒神岡高等学校〕

入賞 芙蓉咲く内定通知届く朝 三年 井上^{いのうえ} 実咲^{みさき}

不安を抱きながら待っていた内定通知がやっと届いた。
もちろん、良い知らせが。自立への第一歩の関門を乗り越えた喜びの朝、庭の芙蓉も喜んでるように咲いた。忘れられない朝である。

入賞 忍び寄る核の気配や秋深し 一年 中島^{なかしま} 聖音^{さとね}

ウクライナ・ロシアの戦をはじめ、不穏な世界の情勢に作者は不安を抱いている。その気持ちが「忍び寄る」「気配」の言葉により、ひたひたと感じられる。およそ八十年前、作者の祖父や祖母たちが同じような思いを抱いたことを想像したのかも知れない。

〔吉城高等学校〕

入賞 今にも太陽を飲む大鰯雲 三年 三枝^{みえだ} 柚奈^{ゆずな}

四・七・七の破調ではあるが、鰯雲がいつばいに広がっている景色が大胆に詠まれている。「今にも」「太陽を飲む」という言葉に、空の果てまで広がっている鰯雲への不安感が籠められている。

入賞 お弁当ゴロツコロリと栗赤飯 一年 森下^{もりした} 葉^{よう}

「ゴロツコロリ」のオノマトペが、作者独特の表現で良い。柔らかい飯粒に紛れて異質な硬さなのにほっこり崩れる栗の感じがよくわかる。
きっと母の手作り弁当であろう。作者の笑顔が見えるようだ。

〈選後評〉

高校生の皆さんの句、とても楽しく拝見しました。
常識にまみれていない若々して表現に感動しました。
自分の表現したいことが「これだ!」という言葉を探すことも俳句の楽しみです。来年も期待しております。

令和四年十一月 飛驒俳句会代表 伊藤浩子

